

光明

第十卷第六號

信をわたらば同行に
あらく物を申すまじきなり
心和ぐべきなり
觸光柔軟の願あり。(蓮師)

大真日本光明團本部發行

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)
昭和三年六月十五日發行(毎月一回十五日發行)

光

明

第十卷第六號

【定價 金拾錢】

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)
昭和三年六月十五日發行(毎月一回十五日發行)

巻頭の葉

◆合掌宣言

第一、我は之れ久遠劫來の業苦に憫む、されど、傷き痛み憫めず魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如
來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。
第二我はこれ曾無一善唯一作惡の凡夫。如來はこれ若くは不取不與の木の木阿方に付き給ふみ知罪惡深重
煩惱熾盛の我を其まゝ救ひ給ふ。
第三、其まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する憐ましき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の内に流れたま
ふ永遠の光明。聞かせん哉。十方に響流したまふ招喚の勅命を。
第四、希くは自力小我の迷妄を破し、み光にはからばれて無我報謝の歡喜に生きん。
第五、「四海の信心の人は皆兄弟」其處に共存の涙ばく。共に和き、慰藉し、管勵して、相愛に生きん哉。

◆本領

毀譽褒貶に動するなかれ。道場に失音する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道
に進せよ。
救はれたる者は立つて、全人類救済のために、熱き血と涙とを以つて、念佛報謝宣傳のために、濁亂の
社會に猛進せよ。



一事に専心なれ

櫻の木は桃の木の眞似をしない。

親鸞聖人は釋尊の眞似をしたのではない。

櫻の木が、萬物に櫻の木になれとは云はない。

一事に忠實なれ

洗濯する時に料理は出來ない。

作すことは一事である。然し其中に動く者は全人格である。

念佛一つに生きる。

それが全人格の動きである時、

我等はそれを救済と云ひ信念とよぶ。



全我を捧げて

住 岡 狂 風

『それ菩薩の佛に歸するは、孝子の父毎に歸し、忠臣の君后に歸して、動靜おのれにあらず、出沒かならず故あるが如し。……』 (曇鸞大師)

暗い心

重い足どりで大地の上をあへぎ／＼生きてゆきます。疲れど、不平ど、灰色な空気が、心も顔もくらくします。時間が流れます。時間の流れにつれて移り／＼つてゆくかうした無意義な一生は誰でもたわられません。

もつと輝かしい人生はないか。もつと生々した生活はないのか。それを考わないではゐられませぬ。同じような人間として生れて來ながら、同一の太陽のもとに呼吸しながらどうして暗いのであらうか。

且に人の冷たき業苦を聞き、夕べに死の扉の前に立てる人の悲哀の聲を聞く時、地上の永遠の相の前に立つて、考へずにはゐられませぬ。

一体何が故に幽霊のような生活が続くのでせうか。それは光明がないからです。

光明とは一体何でせうか。光明がないとは生きている道が見つからぬのではありますまいか。生きる道が見つからぬとは、私をなげ出す世界がわからぬのではありますまいか。こう考へて來る時、私たちは私を捧げきることか出来、投出しきることの出来る世界は何かと求めずにはゐられませぬ。

教化

我々の持つ久遠の執着の相の一つに、批判を受けまいとする根強い心があります。

無明長夜の眠りは徒に深くして、自分自らを賢なりとし、善なりとし、是なりとし、正なりとする心は、如何なる親切なる批判をも受入れずに、我を言ひ張らうとします。批判は新らしい世界へ導くたつた一つの強縁であります。批判のない所にどうして向上や創造がありませう、しかるに心の底に巢食ふ悪魔はこの正しい批判をさげようとします。さうして永劫輪廻のふるさを猶もひきまはさうとします。

批判を拒む心は教を斥ける心であります。教を斥ける者の相ほゞ貧しい淺ましいものはありませぬ。一度無限に教へられ導かれる世界を去つた時、其處には高慢な、醜いものが表はれてゐます。

『眞實なる教』それがどれ位、親懇聖人にとつて大切なものでありましたでせう。聖人二十年の苦闘は、唯この眞實教を見出すためであつたと云つてもいいでせう。

私をほんどうに掘り出してくれる者、それは、眞實の教であります。眞實の教のみが、私を無限に批判しつゝ、教の内面に盛られた一切の法と價値とを與へてくれます

人間の苦惱は、人間の苦惱を生み出したと同一のものによつては解決しませぬ。火は火によつて消えず、氷は氷によつてとけませぬ。愚痴はいくらならばべて見たつて要するに愚痴であつて、決して解決ではありません。釋尊を佛陀世尊としたものは彼の背後に輝き、彼の心内におどづれた法身であつて、地上の無明煩惱のやりくりではなかつたのであります。

重い足どり、その足にまきつけられた重い鎖、その鎖を断つものは教化であります。無明の眼は、眞實の教がこの暗さを明るくするのであることすら知りませぬ。我等は今、不可思議なる力の権によつて久遠の聖殿の前に立ちました。さうして『教』を聞くかうとしてゐます。聖人は『遇ひ難くして今遇ふことを得たり。聞き難くしてすでに聞くことを得たり。』とよろこんでゐられます。

たつた一つの眞實、それを示し、それを與へるものが眞實の教へであらねばなりませぬ。従つて眞實の教でなければ眞實は決して與へられませぬ。

眞實を名のるものはいくらでもあります。しかし眞實は二つとあるものではありません。眞實と方便、眞實と權化、眞實と虚偽、それを見わけることは六ヶ敷いことであります。我等は眞實でないものを眞實とあやまり、虚偽を虚偽と知らずして道をふみ迷います。しかし眞實を眞實と知る眼を與へるものも亦眞實の教であります。かく考へる時、我等は何時も、私自身の獨斷を捨て、限りなく過去の聖賢がたどつた道を忠實に學びつゝ、眞實教を哲學せねばなりません。

信じようと努力する世界が宗教の世界でなくて、信の世界が宗教の世界であります。信じようとする所には自然ならざる、はからひがあります。信する世界では、肩のこりがなくて必然であります。自然であります。かゝる眞實の信心は、如何にして成立するかと考へた時、『信は、聞と思より生ず』との言葉をおぼひ出します。聞かかげて

も思がかげても成立せないのであります。聞とは眞實教を聞くことであり、思とは、我等の思念の世界の事實であります。聞くこと、思念すること、の一致、其處に信の世界が成立します。

親鸞聖人は、大無量壽經を以つて眞實教とせられました。其大無量壽經は、如來の本願を説くを經の宗教、即ち要とし、如來の名號を説くを經の体とします。

大經を眞實教であると思念せられる聖人には、見よ、其の如來の本願と、如來の名號とが聖人の上に廻向せられて、聖人の信となり、聖人の眞生命となつてゐるではありませんか。大經の生命は、そのまゝ聖人の生命であり、大經の体は、聖人の信仰の体であります。

『眞實教なり』との体験は、信の成立つ最初の全体であり、最後の一切であります。信も、行も、證も一切は、眞實教の發見と共に成立します。かくして大無量壽經は、聖人の中心生命でありました。

宗教とは實に我等の中心生命の發見であります。

若々しい生命

大聖釋尊の御一生が光輝赫々たるものであつたことは勿論であります。一切衆生に對する徹底せる慈悲、無我の利他、如何なるものも救はれてゆきます。

日蓮上人は法華經の中心にふれて如何なる迫害の中にも、南無妙法蓮華經と稱へて立ちました。法然上人は、死罪に行はると雖も、念佛を停止すべからずと叫び、親鸞聖人は、念佛者は無碍の一道なりと叫ばれました。

たつた一つの眞實、その眞實の前には自分全体を捧げてかゝつた所に聖人の世界があつたのであります。投出す世界は決して、利己主義の世界ではありません。利己主義であるならば、それがどれほど懸命になされようと、斷じて眞實生活ではありません。

學問に秀でた人はあります。しかし、命までなげ出す人がありませぬ。宗教でもそれが硬化して若々しくもえる生命を失つた時、複雑なる形而上學だけを殘して、間違だとか、正しいとかの争ひに日を暮すようになります。宗教が正しい學問に指導されねばならぬことは勿論です。しかし學問は學問であつて生命ではありません。新しく興つた宗教がよく世道人心をつなく所以は、假令其宗教の持つ學問は整頓されず、教理には不備な点があるにせよ、潑刺たる生氣が漲つてゐるからであります。祖師といふ祖師に、この若々しい生命の流れてゐないものはありませぬ。身命をすら惜まない態度がみなぎつてゐました。

捧げきつて

『それ菩薩の佛に歸するは、孝子の父母に歸し、

忠臣の君后に歸して

動靜おのれにあらす

出沒かならず故あるが如し。』

と曇鸞大師のお言葉であります。

私は昔の忠臣たちが、義を泰山の重きにおいて身を鴻毛の輕きに比して、信ずる君公のためには、命を捨て、惜まなかつた心持を考へずにはゐられませぬ。大石藏之助の一擧手一投足は、決して彼のためになされてありませぬ。立つも殿様、坐るも殿様の様、殿様の心中に燃ゆる炎は藏之助の心中に燃ゆる火炎であります。貧富も問題ではありませぬ。興亡も、生死も、ほめられることも誹られることも全て一切が問題ではありませぬ。この一事のために生きます。

信仰の天地がそれであります。ほめられる。それがどうした。誹られるそれがどうした。生も死もそれがどうした。我と我が心におこる妄念それがどうした。煩惱がど

うした。學問がどうした。道徳がどうした。榮達がどうした。流罪がどうと云ふのだ。心を弘誓の佛智にたて、念を難思の法海に流す。牛を盗まずして、牛を盗んだと云はれても、其處に一言半句の辯明もない。至尊の前に頭をたれて、善男子とよばれ、善女人と呼ばれる。黙して語る心の海、其信の海こそ合掌の底に擴がる信樂であらねばなりません。

生命さえ捧げることの出来る人を持つ者は幸であります。師匠のために生命を捧げ得る人も幸であります。子供のために命をささげる者にとつては子供は生命であります。夫のためには死すら厭はぬ者にとつては、夫は妻の生命であります。

佛のためには命を惜まず、法のためには命を惜まず、僧のためには命を惜まぬのが佛教徒の生活でありました。生命すら投出すことの出来る善知識にあつた者は幸であります。如何に迫害の中に立つても眞實を眞實として受けるためには死罪流罪すら共にして『これ猶師教の恩致なり。』とさげんだ親鸞聖人を弟子に持った法然上人は幸

福であります。盲信することや偶像にすることはおそろしいことであり淺ましいこと
でありますけれど、共に一なる世界に呼吸する善知識なくしてどうして信の世界があ
りませう。

法のためには如何なる辛苦艱難をも露いとはせず、忍従して、唯一の大道を地上に培
つたのも過去の聖者たちであります。大法のためには、一切を惜まず、大法がふみに
じられる時には生命を棄て、殉教しました。

大法は肉体よりも大切です。大法は家庭よりも大切です。大法は妻子眷族よりも重
い。さうした忍従と傳持に一身を捧げる人なくして大法が大地のものとなりませうか
一つの思想が表はれる。國法が死刑をもつて壓しても、俗衆が如何に迫害しても、
眞實が眞實である限り、幾多の生命を犠牲にしても、大地の上に擴がります。大法こ
そ大法に生きる人を生むのでありませう。幾多の悲劇が其周圍をとりかこみます。し
かし大法の遵奉者は屍をふみ越え、苦惱の中に七轉八起して受けついでゆきまし

た。かくした彼等の一生は、意義深いものであらねばなりません。

生命の歌

おちつけないのは、自分の生活に價値が見出せないからであります。嫁入つた女が
逃げ出すのは、夫の上にも、一家の中にも、自分の立場にも、價値が見出されな
らであります。自分の立場が重要であることに目覺めた時、假令身を粉にせねばなら
ぬほど苦しい境遇になつても逃げはしません。流轉するのは、純一な價値を見出せな
いからであります。「自分があつてもなくつてもいいのだ。」といふ世界にはおちつ
けませぬ。

眞實の教は、浮雲のような存在であつた我等の上に至上絶對の價値を盛上げます。
彌陀をたのめば、南無阿彌陀佛の主になるのであります。罪惡生死の凡夫とは、我
等の全体でありますけれど、それは決して眞實のものではなくて、假相であります。

救はれた者にとつては、南無阿彌陀佛こそ本質の價値であります。我等の存在は至上絶對の價値が與へられたのであります。至上絶對の價値を自覺した者が、何で自分を粗末に考へたり、徒らに弊惡卑怯に囚はれてゐられませう。

其一生は台所でお炊事と子供の養育に使はれるかも知れませぬ。田舎で一生涯を耕すことにおはるかも知れませぬ。華々しい一生を幸福と考へることは凡夫の持つ一つの間違ひであります。名もなき一生が價値がないと考へるのは、智慧の眼がないからであります。公園の中で咲いた花が幸でもありません。深山がくれに咲く花も、花は花であります。

社會組織が進んで來た今、殉教の血を捧げねばならぬこともありますまい。しかしながら一切人の上に至上の價値は盛られねばなりません。

台所の隅にも、工場の中にも、山の田の中にも、生命の歌は歌はれねばなりません。一國の大臣の失政は國家將來の上に拭ふことの出来ぬ大缺陷を残します。台所の隅に

あがる心の歡びは一家を明くします。我が一擧手一投足が、法界の一切に通ずることを思ひ、念佛の我が、如來の生み出したまふことを考へ、合掌念佛せる者の立場は、極樂淨土がその本地であり、念佛が盡十方無碍光如來の廻向せられたる全部であることを憶ふ時、其處に私の全体を捧げきります。

粉 骨 碎 身

『如來大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし』

正像末和讃において、

『釋迦如來かくれましくて

二千餘年になりたまふ

正像の二時はおはりにき

如來の遺弟悲泣せよ。』

と悲歎の低に筆をはじめた聖人は其結讃において、『如來大悲の恩徳は……』
 ……』と廣大なる恩徳を感得せられて報謝の不行に生くべきを述べられて
 あります。大きななる生命の道に、遠ざかつてゐることに悲泣した者だけが、一切
 の時代と處と人とを超えて、恵まれた眞實に對するよろこびを天地とも等しく感ずる
 のであります。

議論も聞きあきました。

安價なる涙にも用事はありません。

合掌して立て！

我等は「身を粉にしても」「骨をくだきても」のみ云葉をはたして生かしてゐるだ
 らうか。

大乘無上の大法………一切の理論を超へ、疑謗を超えて、身命すら棄て

ゝかゝる人、大法はこの人を求め、この人を生まうとしてゐるのではあるまいか。

一切を捨て、一切を得よ。

小我を打くだいて如來の中に捨てよ。

一さい口を打くだけ、

囚はれた者の世界は小さい。

如來の中に捨てた者は、

其處に大きな社會を發見する。

如來の中に生きる者は、

同時に大きな社會に生きる。

社會の中に自分を棄てよ

社會は如來ではないけれど

無限の生死海を開いた眼で見かへせば

生きる天地が其處にある。

一切群生の上に如來はおどる、

荒波がおしよせても其處を動かすな、

火炎がとりまいてもそこを逃げるな

荒波にくずれるものは打くだけよ

火炎で燃ゆるものは燃しつくせ

如來の身は金剛にして壊れることはない。

一切がくだかれた時、如來よりはぬいたものだけ残る。

やわらかな蕨が堅い大地をきつて出るものを

汝等の一番大切なもの、上に汝の心もある。

金のためにさね、命を捨てる人があるではないか。

浮雲のような権勢名利に命を捧げる人もあるではないか。

三度の食事が興へられる間不平を云つていいものか

『粉骨碎身』の四文字が生活態度になつた時、一切の問題は解決する。假令この身

が、路傍の松並木の肥料にならふとも、生の凱歌はこの人の上にあげられる。



眞の強者

住岡風狂

二〇

□

世の中に他力思想ほご間違へられてゐるものはないように感じます。今日の大坂新聞の論説をよんで見ると、『異安心、眞宗大谷派の紛争』と題せられた社説の中に『一体眞宗の如き他力本願の教義をとり八萬四千の法門を棄て、六字の名號に一切信仰を包攝せんとするものにあつては、嚴密に云へば、宗教に對する學問的研究はことごとく宗祖の主旨に反し教理違反の異安心だ。』とあります。聖人は決して頭から學問を棄てたり、學問的研究をしなすれば異安心だと云はれたお方ではありませぬ。

『日本の將來は他力本願ではいけない』とか、『日本人の頭から他力思想を棄てさせなければ、日本の救はれる日は來ない』とか、他力本願と云ふことばを平氣で、日常生活經驗の説明に轉用されたりするときなど、とんでもない間違ひがおこつてゐます。

無理もありません。門外の人が間違つて考へるだけならまだしも、眞宗信徒の中にすら、少しむつかしい話をする人を、誰でも異安心だといふてしまふ所があります。體驗だとか、自己を見つめるとか、内省とかの、言葉をおそれること悪魔か何かのように考へる地方もあれば、『今度の御講師様のお説教は「このまゝ」が多いから有難い』とかまるで、このまゝといふ言葉に自分の胸を合せてよろこんでゐる老婆たちもあります。果して他力では救はれないのでせうか。又主觀的な言葉が出たら他力ではないのでせうか。

自力と云へば、人はすぐ強きを感じ、他力と云へばすぐ弱きを感じます。それほど人は自ら強いといふことに誇を感じ、弱いといふことに悲歎を感じます。勿論私どもは強いことを求め、弱さを悲しみます。

然れば強いとは何を意味し、弱いとは何をいふのでせうか。強弱といふ問題は極めて種々なる方面より考へられる問題であります。精神的に強い人とは何を意味しませうか。一國全体が湯がわくほどの人格を悲難してゐても、てんとして恥じず、厚顔を臆する色なく曝してゐるような場合にも、あの人は強いといひます。かゝる場合の強さは、釋尊の恥辱とした、いいね、無智、無懺、罪惡としてゆるすことの出来ない執我慢の強さであつて、眞の強さではありません。自分に對する批判の眼が曇つてゐて、惡に大膽であつたり、責任感の鈍い者のことを強いといふならば、我等は、決して

てさうした強さを求めてはをらぬ。佛教にいふ忍力成就とは決してかゝる強さではありません。

宗教的にいふ弱さとは、罪障に對して敏感であることを意味します。龍樹菩薩は、他力念佛は、弱くふとれる者の道であるといひつゝ、自らも遂に初歡喜地を得證した菩薩でありながら、念佛の弱き者の道にゆきました。

弱き者は小さき罪惡にすら戦きます。十圓の金を盗んだために、發狂した女もあれば、二十圓の金を盗んだことを悔いて病氣になつた青年もあります。幾十万、幾百万の公金を巧妙に私有して恥ない政治家に比較すると彼は弱き者であります。罪惡意識は、罪惡の量によつておこるのではなくて、魂の尖つた鋭い者ほど深いのです。即ち弱い者ほど強いのです。彼は苦惱を深く感ずるでせう。

近頃開業した醫院で一人の患者が死ぬると、其處の奥様は泣いて／＼悲しみました。すると長年こんなことに携つた人が、『奥様そんなに弱くてはごうします。患者一人

位死んで泣いてごうします。』と叱りました。奥様もやがて幾人死んでも何ともない強い人になるでせう。しかしそれは眞に強くなつたのでせうか。

さうした意味において私は年々強くなつて来るようです。私はそれを恥ぢないではおられません。釋尊はこうした意味においては弱い人でありました。一人の老人を見て驚き、一人の病者を見て厭い、一人の死人を見て城を捨てるとは、何といふ弱さでせうか我等凡夫はそれと比較すると強いことであります。

□

世間普通の強さとは、我慢我執の強さではありますまいか。我等をして容易に罪障を感せず、己の苦しみの原因を他人に轉讓して、自分が其責めを負ふまいとし、どこまでも他人を責めて『俺は悪いことはない。不都合は彼にある。自分は正義の道を行つた。一点良心に問ふてやましい所はない。若し俺が悪いといふならば。俺よりも先

きに彼が悪いのだ。』とて、自ら清しと頑張るが如きは皆我慢の強さではありますまいか。

かうした強さは忠實に自己を反省する智慧を失つてゐること、素順に現實の一切を攝取する慈悲の欠けてゐることに原因するのではありますまいか。

眞の強さとは、眞の自己を内省する智慧と、現實の一切を抱きしめてゆく慈悲とを有つて、如何なる苦惱をもさけず、責任を自覺してゆく懺悔の人のことではありますまいか。

人間の有する我慢は決して大地の上を清めませぬ。それが強く働けば働くだけ、自己共に傷つけます。彼はあがりあがつて、おちばを知りませぬ。おちぬ間、彼は彼の有する邪智を使つて流轉します。自分はあるが気がつた氣でも、他からこれをながめたら、自分の葬られる穴を自分で掘つてゐるのにすぎませぬ。かうした強い人のことを釋尊は、眼なき人、耳なき人と名づけられたのであります。責任の轉讓と、苦惱の逃避と

恐鈍なる大膽は救はれぬ強さであります。

□

我慢による強さは斷じて正しい強さではあり得ませぬ。彼は眞如より來生せる如來に歸命しませぬ。如來に歸命しないとは、眞に自分を知りませぬ。

親鸞聖人によつて體驗せられ、提唱された他力とはこの我慢我執が否定された所に表はるゝ、自然法爾の世界であります。

若しこの如來によつて充された、我慢なき世界を今一度見返せばそれこそ眞の強さであります。柔和なる強さであります。自然の強さであります。さうして先きの邪智高慢なる強さは、この世界より見れば、眞の意味における弱者であります。誰か田中首相に刃をむけた青年を強いといひませうぞ。矢でも盾でも椅子にかがりついてはなれぬ者を強者といひませうぞ。眞の他力の世界より見れば、皆一様に迷へる者の強さ

であり、最高の道徳率より見ての弱者であります。

□

眞の他力思想とは、我慢による強さのない世界だと申しました。我慢は我に執着することによつておこります。我の世界は信なき世界であります。信のない世界は如來のゐない世界です。衆生のゐない世界であります。如來もゐないし、衆生もゐない世界では、自治の精神や、自分の生かされる大道などはありませぬ。一切、他に支配されて動く世界であります。人としての價値の世界を持たぬ世界であります。

親鸞聖人は他力とは寝てなにもしないことだともいはず、このまゝといふ云葉を大事におぼわてゐることだとも云ひませぬ。

『他力とは如來の本願力なり』

と云はれました。誠に他力とは如來の本願力の活躍をさして云ひます。信心とは、

この如來の本願力が衆生の上に廻向されて開發するのである。だから他力の信心とは如來の本願力の成就であり、如來願心の具体的顯現であります。だから、如來の願心と、信心とは其体を一にします。

如來願力の内容は、智慧と慈悲であります。至純なる、至誠心が其体であります。親鸞聖人は『弘誓の船に乗る』と云ひ『願力に乗ずれば』と表はされました。信ずるとはこの願力に乗することでありました。乗すると云へば、我と乗と二つあるようでありますが、これをつきつめて考ふれば、如來の願心が人になつたことであり、信心は我等の主觀でありますから。如來の願心が我等の眞主觀となつたことであり、眞實に主觀の力を體驗したことであります。この信が客觀に如來の實在しますこと、信知するのであります。信を南無によつて表はされ、佛を阿彌陀佛によつて表はされます。信すなはち南無は如來に歸命した我であり、阿彌陀佛は客觀のあなたであります。而して南無と阿彌陀佛は一体であります。

この如來願心の廻向顯現せる信心こそ、眞實の我であります。この信は、我等の我慢を破り、我執をつきくづして現はれます。

この信は金剛であります。如何なる力を持つても破壊することの出來ぬ力であります。

□

大乘佛敎の眞精神が、菩薩道である限り、無我の精神は、宗派の如何を問はず、當然根幹でなくてはならぬ思想であります。無我の精神をにおいては他力本願もありませぬ。逆如聖人も『佛法は無我にて候』と申されました。無我とは人間の我慢我執の否定された世界であります。

大地の上は人間の腹底に巢喰ふ我慢我執による強さによつてけがされてゆきます。我執の強さから信の強さへ我慢我執の強さから自然の強さへ邪智の強さから眞實の強さ

にと目覚めてゆく所に新しい世界が開けて來ます。眞の他力思想はかくて人間のほんどうの生き方を教ふるものであります。如來の眞實は我慢我々の心を貫きつて私をほんどうの世界につれてかへります。如來に歸命する時、腹底深さも知らぬ我が心を見せられて合掌せずにはゐられません。一日に一度でもほんどの我にかへることの恵まれた人は幸福であります。信の人こそ眞の强者であります。

何故私は親鸞を崇拜するか

(文責在記者)

ドクトル ゲン デルト

今日は親鸞聖人の降誕會でありましてお招きに預りまして非常にうれしく思ひます

私は佛教につきましては素人でありまして日本語もうまくゆきませんから思ふことが話せるかどうか分りませんが私が親鸞聖人を崇拜する心もちを話して見ます。

キリスト教の信仰は私の生れた獨逸の家がキリスト教、殊に新教でありますので、常に聞かされて居ますが人間は自分の力では救はれることができない自分自身の行ひによつて救済の目的を達することは出来ない故に他の力、即ち神の力でなければ救はれないと申します。そしてそれを信じて居ました。けれどもはるばる日本まで尋ねて來て見ますと私は驚きました。それは私の小さい時から信仰である神による他力の信仰が日本の法然親鸞の兩聖人によつて説かれてあることであります。非常に驚いて研究しました。キリスト教の教義から取つたものではないかと思つて研究しましたけれどもいくらしらべてみてもそうした痕跡は見出されません。

ところが深く調べて見ますとキリスト教の他方と親鸞教の他方思想とは似通つた様で全く根本に於て違つて居ることを發見させられました。即ちキリスト教に云ふ他力

の氣持は自己の責任を放つてキリストが十字架にかゝつてくれたことによつて天國に生れようと云ふづるい自覺のない無力の他力であります。

それに代へて親鸞聖人の申された他力とは全く異つた自覺から生れた絶對の責任感の上に立つて自己が自己を救つてゆくまゝ罪深き自己の自覺の上に立つが故にけんきよなる氣持より生れるものは彼岸なる如來のお力によりて救はれるといふ他力でありました。

私は既成宗教と云ふものに對して未成宗教といふのに同感をもつ者であります。

親鸞の教理は形に於いて従はなくとも、つと尊いものは聖人の信そのものであります。

一つの信仰が生れるのには偶然ではなく生れなければならぬ理由がそこに存在します。自我意識の強い時代には自力が主張されます。そしてその自我の行詰りが我なら

ぬ力を要求するのであります。

すべて深い思想家の生れる時代は天下泰平ではなく複雑な行詰つた中から生れます。キリスト教にしてもその初期の時代は非常に恐怖を抱いて時代であります。戦争後などに宗教が要求されるのもこのけいこうでせう。自我の強い現代でもすべてか自我意識が高調されますけれどもやがてこれに行詰りを感じ我々の力では何も出来ない無力を感じる時代が訪れます。そしてそこに無我思想の上にたつ新文化が生れてくることとせう。

マルチンルーテルにも同じ様な親鸞聖人に似通つて自己の無力を痛感したところがありました。

親鸞聖人の地獄は必定住家であると云ふころもちは何といふ正直な自己洞察でありませうか。……………

その謙遜な崇高さが私は限りなく尊いのであります。そして而もそれが失望の聲

ではなく聖人の生活に於ては此と反對に必定淨土の生活者でありました。

この氣持を通して日本民族の深い思想が伺はれます。

現代は既成宗教を遠ざかつて一般に新しい生命を持つものが生れ出ようとし又求められて居ます。

甚だしく無神論者によりますと人間は宗教からはなれて宗教は地上からなくなるだらうと申します。然し私は思ふ、形式の宗教はすたれもしよう。けれど宗教を生んだ人の魂に根ざすものはいつまでも變らないのでありませう。

自我に行詰り無力を知るどん底からたち上つた親鸞聖人の信仰は永久に絶へることはありません。そしてその信仰は裏面に於て佛として必ずこの實をむすばなければならぬと思ひます。……………

(完)

右は宗祖降臨會の當日報知講堂に於て獨乙哲學博士グンデルトが語つた講演の筆記であります。氏は日本の宗教研究のためはるばる獨乙より日本に來り高楠順次郎博士の下で研究してゐます、

講演の旅

四月十七日夜から二十日の夜まで山縣郡加計町で大會です。骨身をおしませ働いて下つた吉見さん支部の幹部の方々の容易ならぬ苦心でできた大田部の大會です。行の巻について語りました大盛會でした。二十一日の夜から二十三日まで戸河内支部が臨時に講演會をしました。こゝは静かな會でした。みなさんにあへたことが、なによりです。トホゲを一里歩いて二十四日朝筒賀村にきました。二十四日から二十六日まで栗栖敷夫氏宅で、祖先のトム多ヒです。筒賀村の本郷でははじめてこいつていゝのです。盛會でもあり、極めて有意義な會でありました。新築された廣い邸宅さ。美しいお庭にも増して栗栖氏の求道心をほめた、へすにはあられません。二十七日の夕方疲れた体を井仁に運びました。小田守登氏の亡き母上や其他の御法會です。會場は正音寺です。院主さんがいゝ人。集まる人がもう足かけ六年間のおなじみです。多人數が御騒動をかけました。五月一日の朝、雨の中を廣島へ販りました。

五月一日から三日間本部例會。本部では本月から本部員だけで御木典の講義をはじめました。朝か、夕食後か、時には一日に三時間ももたります。みな本氣で勉強します。□十一日夜から十四日夜まで愛媛縣の大三島上原の極樂寺。寺は興派です。岡崎俊龍氏が院主で曾て三原の明眞寺でお目にかゝつた事のある方です。瀬戸内海の風光はさながら繪のようです。氣持のよい三日間を送らして貰ひました。參詣することに熱心な地方です。十五日朝汽船で尾道につきました。これから福山市です。□十五日から十八日まで、福山精神文化協會主催。淨願寺。この度新しく聖席に出はじめの方もあり、静かない會でした。藤田徳雄氏もさうく四日間滞在しました。中井醫院は私がある時は何時も大人數です。□十九日 二十日は川口支部大木氏宅が會場です。大きな立派な家です。大きな庭をながめつゝ、くつろいで二日間過しました。□二十三日、深安郡賀茂村。深安技藝女學校で講演。校長品川先生は十年ほど前に裁縫の塾をはじめられました。それが發展して遂に今日になりました。十年の間。身も

心も打こんでなされた家庭的な學校です。校舍も粗末です。が他に見られないあるものを見た心地がしました。生徒三百人です。どうかこの學校が、外ばかり形ばかりの發展に墮落したり。官立の眞似をするこゝをさけて健實な發展をするように念じないではあられませぬ。夜は全校の教諭で高工出の後藤先生のお宅で講演しました。すむさ人のあない街道を五人の人のぞた自動車福山市に走ります。賀茂は三島駿六の故郷でもあり、後藤氏は其親族です。車中の一人に三島氏があられたことも勿論です。二十六日福山市長者町河井氏宅座談會。廣いお庭には、大きなコヒがたくさんあます。奥様が主なので其お友達の奥様、口羽少將の夫人其他十名ばかりです。これで二回目です。二十七日から三日間岡山市西寶寺。二十七日朝岡山驛につくと、石井睦調氏宅の皆權御一同と、杉岡さん田中さんなどが出迎て下さる。私たちの宿は石井さんのお宅です。眞實のみ光る涙ぐましい空氣の中におつきます。又しても皆様の眼には涙です。私をよぶために一家中のみな様が心を揃はての御親切です。縣女の五年の絹密嬢が本年の二月、宣山の石井醫院まで、

死の門前には憐んで床にれてゐた地をあげて來られ、來の眞實に眼がさめたことが機縁になつて、絹家さんのおばあ様が前からの因縁なので、まことに御一家そろつての求道です。毎日二十分かつて西寶寺に通ひました。三十日朝涙のうちに念佛しつゝお別れしました。汽車は私たちがせて東へ走ります。三十日三十一日神戸市の岡田杉野うめよ様の念願は、病める兄さまの心の不安のために私をひきつけたのです。神戸驛頭には中村博士の奥さんと杉野さんがあます。私はすぐ須磨に病める藤井氏をさひました。一時間ほど語るさひきかへして五度筋の中村さんのお宅につきました。廣島出身の方で山中高女の同窓生が集つてゐられます。集つたものはみな廣島生れて、夕方まで座談です。夕方になるに中村先生がかへられます。三十一日午前中須磨にゆき日が暮れるまで藤井さんにおはなして、一度中村さんの所へかへりました。夜行の最終で福山市にたち、朝中井先生の所へかへりました。中井は自宅と同じ感じがします。午後三時多數の方々に見送られて一行四人廣島にたちました。今晚から又本部の例会です。あゝ六月、世は涼は夏になりました。みな様お大事に。本月は本部にあたいつもりです。

注 意

- 一。誌代拂込の際は光明と聖光との區別をはつきり記すこと。
- 一。轉居通知は新舊兩住所を書いて下さい。
- 一。誌代拂込は振替を御使用下さい。切手は使はぬこと、やむを得ぬ時は五厘か貳錢切手に限ります。
- 一。文字をはつきり正確にお書き下さい。
- 一。主管に特別の用事の外、申込、中止、送金等は一切事務宛に御送下さい。
- 一。誌代前金切の時は、どうかお早く御送金を願ひます。お困りのお方は其御旨申越して下さい。

本誌定價

一部 金 十 錢 (郵税共)
一ヶ年 金 壹圓貳拾錢 (郵税共)

昭和三年六月十日印刷
昭和三年六月十五日發行

編輯兼發行人 花岡 靜人
印刷所 佐々木温三
印刷所 光明團印刷部

發行所 廣島市八丁堀二十六番地
光明團本部

振替貯金口座下關武參〇八番